

1. 対話する言葉を持たない、孤独な現代の登場人物

i) 「語り」としての長いせりふ

ギンズブルグの戯曲における一番明確な特徴は、非常に長いせりふが頻繁にあらわれることだ。内容は、話者である登場人物の身の上話や、話者と関わりを持つ人や事情についてであり、一見したところ、観客に場面の背景について説明する方便のようだが、以下の特徴から「語ること」そのものに重要性があると考えられる。

○話し相手が、それほど親密でない場合でも、すでに事情をかなり知っているはずの人間でも自分の過去や現在の事情を事細かに、とめどなく話す。

○自分のことを語っているのだが、しばしば他人事のような、お話を語って聞かせているような、妙に客観的な感じを与える。

○舞台上の具体的な行為に結びつかない。

ii) 「会話」場面における困難と「不在の登場人物」

一方、登場人物間の対話では、言葉は飛びかうのだが、すれ違いや、いがみ合いなどうまく行かないケースがほとんどである。

長い「語り」と「対話」の困難さの関係をよく示すのが、大いに語られて存在感はあるのだが、実際には登場しない「不在の登場人物」である。ギンズブルグの戯曲にはいつも、この「不在の登場人物」が複数登場するのだが、なかでも「主要な不在の登場人物」は、主人公にとって特に重要な意味をもつ存在であり、長いせりふの中でこと細かく描写される。しかし実際に両者が相対したとしても、会話を成立させるのは難しい。彼らは「話す」ための言葉を持たないのである。そのことが、まさに長いせりふの中で「語られている」。

◆「語り」は話者、とくに不安定な背景をもつ主人公が、記憶のなかに自己を位置づける自閉的な性格を帯びている。一方、うまくいかない「会話」では、言葉を共有できない現実が描かれている。

2. 言葉の持つ身体性

i) 抑揚とリズムの言葉

語順の入れ替わりなど、実際の話し言葉のもつ不規則性を利用し、語や句のくり返しなど、音韻を調整することで、リズムや抑揚が保たれ、強化されて、音楽的な言葉になっている。

ii) イメージを喚起する言葉

モノや行為を並列させていくことによる語りが、心理ではなく、イメージによる理解をうながす。また生理的・身体的な表現を多く使うことで、感覚的な精神状態の把握を可能にする。

また人やモノを別の名前や言葉で代用したり、人を動物で代用したりする手法も多く使われているが、これもイメージを喚起する言葉の例である。

◆ギンズブルグの言葉は、意味そのものよりも、音声や抑揚に重点がおかれているといえる。また言葉の演劇ではあるが、視覚をはじめとする感覚によるイメージで観客に直観的な理解をうながすという意味で、身体性に依拠している。

3. 「言葉の演劇」と「演劇の言葉」

i) イタリア語の口語と「言葉の演劇」

ギンズブルグがはじめて戯曲作品を書いた1960年代初頭のイタリアは、全国的なレベルで標準と言える口語が急速に広がっていく途上にあった。そのような状況下で、話し言葉を必要とする演劇のために書こうとした作家はギンズブルグの他にも複数存在する。パゾリーニとモラヴィアは、身体言語を全面に出した演劇や、直接言いたいことに言及せず他の言葉で代用する演劇に対抗し、言葉が主役となる「言葉の演劇」をめざした。

しかしギンズブルグの戯曲の言葉は、彼らの言葉とは根本的に異なっている。ギンズブルグの言葉は深い意味を持たないが、それが現代の言葉の特徴であり、この言葉でなにかを伝えることはできないという認識に基づいている。これらの言葉はリズムと抑揚に支えられ、その特定の文脈のなかにおかれ、連呼されることで、唯一のものとしての価値を持つようになる。また、ギンズブルグは身体性を与えることで、心理に陥らず複雑な感情を表現する言葉として成立させている。

ii) 登場人物にふさわしい言葉

パゾリーニやモラヴィアの作品と比べたときに際立つもう一つの特徴は、ギンズブルグが徹底して登場人物にふさわしい言葉しか語らせないことだ。「標準以下」の言葉を使う登場人物は、それにふさわしい態度をかたくなに守る。認識や論理を共有したうえでの対話は成り立たず、「対話」によって倫理的な問題を議論したり、作家の考えを代弁することはない。

◆ギンズブルグの戯曲は、観客を説得したり、教育しようとはしない。主人公の脆弱さや、多数の声による「語り」、そしてリズムや音、くり返しや対位法的な言葉によって生まれるユーモアが異化効果となり、観客は心理的に距離をおいて俳優たちをながめる。作家は登場人物たちに倫理的な判断を下さず、それは観客にゆだねられている。

20 世紀に発生した多種多様な演劇の実験は、新しい時代と世界にふさわしい舞台の言葉を模索する試みであった。俳優の体に基づく身体性は、アヴァンギャルド演劇において新しい演劇言語となり、現代演劇一般にも必須の概念として浸透している。小説家であるギンズブルグの演劇は「言葉の演劇」であり、一見したところ新しさのない会話劇のようにも見えるが、その言葉には身体性が内在しており、そのためにモチーフである現代の世界と人間を表現するのに有効な新しい演劇の言葉になりえている。